

Title	資本主義技術の史的構造
Sub Title	Historical analysis of capitalistic technics
Author	野口, 祐
Publisher	慶應義塾経済学会
Publication year	1952
Jtitle	三田学会雑誌 (Keio journal of economics). Vol.45, No.8 (1952. 8) ,p.545(35)- 555(45)
JaLC DOI	10.14991/001.19520801-0035
Abstract	
Notes	論説
Genre	Journal Article
URL	https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AN00234610-19520801-0035

慶應義塾大学学術情報リポジトリ(KOARA)に掲載されているコンテンツの著作権は、それぞれの著作者、学会または出版社/発行者に帰属し、その権利は著作権法によって保護されています。引用にあたっては、著作権法を遵守してご利用ください。

The copyrights of content available on the KeiO Associated Repository of Academic resources (KOARA) belong to the respective authors, academic societies, or publishers/issuers, and these rights are protected by the Japanese Copyright Act. When quoting the content, please follow the Japanese copyright act.

うものであるということになるであろう*

*地主層の分析は山林所有の分析を缺いては充分ではないこというまでもない。土地所有は、實は、山林所有を含めて一體としてとりあつかわれねばならないのである。そして、農地改革後における地主制殘存の一據點が山林所有にあるということから、山林所有があらためて問題とされるにいたつてはいるのである。本稿の地主層の分析は、別の機會に譲らざるをえなかつた山林所有についての解明によつて補われなければならない。ただ昭和二十五年二月の世界農業センサスと同年十二月の林野利用狀況調査によつて山林所有の實態は、はじめて、明らかにされるにいたつたのである。

附記 本稿は慶應義塾學事振興資金による研究補助に基く研究課題「日本農政學批判」の序説(基礎過程)の一部をなすものである。

一九五二・六・一〇

資本主義技術の史的構造

野 口 祐

序 論

戦後幾つかの論争が自然科学社會科學の領域に現れて來たが、とりわけ兩科學の包括的地盤の上になされた、「技術論争」はその問題把握の鋭さ、論理構造の明確さ及び史的分析に於いて極めて特徴的なものと云ふことが出来る。

謂はゞ此れは唯前に戦前、戦時中の理論的諸成果の結實的役割をはずすだけでなく、實に日本の置かれ提起されている現實の緊急の諸問題解決の鍵として、重要な意義をもつものであつた。即ち日本民主化の要請に答へるものとしての技術の發展、生産力の擴大とその阻止の諸條件の除去が主要な問題となる。

換言すれば本來科學技術は生産力をたかめ民衆の生活を劃期的に豊かにし安定させるものであるが、現在資本主義はその生産力の過剰に困り、市場の困難を招來し、豊富の中の貧困から、ついに經濟を破綻させ民族を困難な状態に陥入らせてゐる。勿論日本の現状も此の例外をなすものでない。

此處で我々は此等日本の置かれて居り、問題解決の實踐的要求に従つて形成された「技術論争」の成果を充分攝取した上で、

資本主義技術の史的構造

「論争」のより明確化と具體化に役立てたいと思ふものである。かくしてこそ資本主義合理化の下に、技術の改善に伴ふ労働の緊張化、強度化の本質が歴史的、具體的に明瞭に把握されて來るであらう。

本論の内容は第一章に於て既成技術論——特に労働手段體系論を展開し、その技術論が機械制大工業の進展につれて獨占化の過程に入ると著しく形態變化を起し、單に手段體系論の形式的抽象の殻に閉ぢこもり認識論理の歴史的具體性から遊離する方向をとつた根據を究明しつつ、戦後新しく登場した技術概念——武谷氏を中心とするグループの形成過程を分析した。勿論此の考察は具體的な技術、工業農業技術、歴史的な資本主義技術解明の前に抽象的な技術一般として研究したもので全て具體的な資本主義技術は第二章に於て資本主義發展過程を通じて、より具體的に解明した。第二章は第一章に於て批判的に展開した抽象的な技術の論理構造が單なる労働手段體系論や、その亜流の見解と異り具體的に生き／＼と活用されるものであることを示して居る。此處に於て此の資本主義技術が日本の現在の經濟社會の特殊性下に如何に歪曲されて現象しているか、その克

服は如何にして成されねばならぬかはより緊要な問題であるが、本論に於ては此の點は取扱はないこととして後日發表する豫定である。

確にこの問題は、まだ一つの試論的段階にすぎず、本格的研究は日本の資本主義發展を基底にしてより具體化すべきものである。

(註1) 武谷氏を中心として形成されたグループであつてそれらの人々及び著作は次の如きものがある、武谷三男「辯證法の諸問題」(武谷三男「科學と技術の課題」星野芳郎「技術論ノート」(二三年五月)、田中吉六「史的唯物論の成立」(二四年五月)、吉岡金市「農業技術學」(二二年一月)。

その他、武谷グループに反對する人々の著作の主要なものをあげると次のやうなものがある。雜誌に出された論文は多数あるので一々指摘しない。三枝博音「技術の哲學」(二六年十二月)、岡邦雄「技術論」(二四年三月)、上林貞次郎「技術及び労働力の理論」(二二年一月)、上林貞次郎「生産技術論」(二六年十一月)。

(註2) 武谷氏の「科學と技術」に平明に表わされているが、より研究の要がある。

第一章 技術論の展開とその論理構造

技術論争史の二齣

究明を通じて理解せられる。此の生産要因は労働過程の三つの要素に分解せられる。——労働力、労働手段、労働対象——つまり一方の側に於ける人間とその労働、他方の側には自然とその質料、これがその關係である。使用價值たる財貨の生産は此の労働過程を根柢にして居り、あらゆる社會形態に普遍的なものである。

労働力、労働手段、労働対象の三つが生産力を構成するものであるが、上林氏は生産力の構成要因を通じて技術の内容を明かにする。従来、技術は三つの意味に用ひられた。第一は労働手段を中心とする場合、第二は生産手段を中心とする場合、第三は廣く労働過程を意味する場合であり、上林氏は技術を以つて第一の場合であり、なかならず狭義の労働手段たる人工的労働手段の體系であり、生産過程の對象的、物的、客體的、客觀的なカテゴリーであり人的、主觀的、主體的なカテゴリーたる労働力に對應するものと考へた。

(註1) 「經濟發展の理論」一〇頁

(註2) 「生産技術論」二九頁 マルクス「資本論」第一卷第五章(一)高昌譯一四九頁

(註3) 同右、はしがき

(註4) 「技術及び労働力の理論」三頁

第二項 岡氏の技術論の方向

岡氏は技術を規定する場合三つの立場をあげる。第一は哲學

資本主義技術の史的構造

武谷氏を中心としたグループが既成舊唯研の技術概念に對して本質規定として、新たな技術概念「人間實踐に於ける客觀的法則性の意識的適用」を確立したことは非常に劃期的なものである。

こゝでは新しい技術概念の形成過程を簡單に分析することにする。勿論最近の諸論稿を參考にして今までは別の視角から究明して見た。その意味でまづ最近の上林氏の見解を紹介することから出發する。

第一節 労働手段體系論の系譜

第一項 上林氏の技術論の意義

上林氏は最近の著「生産技術論」に於て意識、觀念が人間を作つたのでなくて労働、生産が人間を作り人間を進化せしめたものであるとし、人間は生産過程に於て労働対象と労働力を媒介物として労働手段(道具)機械を使うことを覚え、それによつて、自然を征服すると同時に協同労働による道具の使用は言語を發達させ又知慧の擴大深化を促進させるものであるとしている。此等が人間をして動物と區別させるものであり、労働による豫定計畫的行為が人間の特徴である。そして動物にとつては作られたものであるが、人間にとつては歴史そのものを意識的に作るに至るのである。

そこで上林氏は以上の基本的考察に立ちながら技術の本質を如何に規定するであらうか。それには先ず生産の一般的要因の

的立場であり技術を以つて行為的な概念とするもの(註1)第二は自然科學的立場にして、技術を科學の應用と見る概念規定をとる(註2)。最後に社會科學的立場からの考察であつて、上林氏と同じく労働手段體系論をとるもの——即ちブ、ハーリンの見解——である。

第一、第二の立場は重要ではないが第三の立場は「技術論争」の中心テーマとして問題になつたものであり、検討すべき概念規定である。岡氏はマルクスの技術に関する記述を引用している。「技術學(Technologie)は、自然に對する人間の能動的態度、彼の生活の直接的生産過程を鮮明にし、そしてそれによつて又彼の社會的生活關係及それから生ずる精神的表象の直接的生産過程を鮮明にする。」

かくの如き自然に對する人間の働きかける活動に於て労働手段が丁度動植物の器官のように社會的人間の生産器官になる。つまり労働手段及びその變化が生産力の一要素として生産關係に影響を及ぼしているものであつて、一般的に生産技術なるものは生産力の諸要素と密接に結合し、それ以外のものには求め得られないものである。

この生産力の要素のうち労働対象は技術と規定し得べき概念ではない。次に労働力は「労働の強さ」と「労働量」なる二因子に分解されるが、前者は労働手段によつて後者から測定されるやうになる。そして人間の技能や知能は大工業に相應した形

態をとるやうになる。

こゝで岡氏は技術の概念を基礎的な意味に於て探究した結果、^(註4)「ハーリンと同様労働手段以外にないことを規定した」。

さてこの規定によると技術は労働手段の體系そのものであるから全く客體的物質的な存在である。そして或る社會の生産技術なるものは全く労働手段に於て具體化され表現されているのである。ところが労働手段は一方で労働力と辯證法的に働き合^(註5)い、又他方に於て労働対象と辯證法的に接觸滲透する。従つて技術とは労働手段體系を中心とし労働力と労働対象に辯證法的に滲透している概念に他ならない。

最後に岡氏は技術概念を結論して「技術とはその社會に於ける労働手段の體系によつて測られる一つの水準である。」と述べている。

此の論點がその論理的―貫性を缺如していることは技術概念を單に労働手段體系といふ實體概念で把握し切れないものがあり、岡氏の規定が労働力と労働対象との相互滲透による本質規定へのプロセス的段階にあることを示している。

(註1) (a) カップのやうに人間學的に道具を人間の身體器官の延長と見る立場。 E. Kapp; Grundlinien einer Philosophie der Technik, 1877. (b) ファイスのやうに技術を發明に歸し技術を一つの手段の創造と歸結するもの。 M. Eytz; Lebendige Kräfte, 1904.

(註2) 後田の武谷氏の説を岡氏は云う。岡氏は此の説は技術を單に科學の應用と見る通俗的見解であるとし、又生産の自然的側面のみ主張した見解としている。

(註3) マルクス「資本論」第一卷第四篇第十三章高昌譯

(註4) ハーリン「史的唯物論」一九二頁嶺崎輝譯

(註5) 岡邦雄「技術論」六七頁

第二節 労働手段體系論の形態變化

前述の様な労働手段體系論はゾムバルトによつて著しく形而上學的考察の中に引き入れられ、技術の廣義の概念は「一定の目的を達成するに適當な手段全ての複合、全ての體系といふこととが云へる。」とし又「技術には技能及知能が含まれている。」と考へた。

そして狹義の技術―生産技術なるものは「我々が物財を作る爲に用ひる操作様式のみを含む」とした。^(註6)

此の様に近代技術をして科學の技術への應用であると規定しながら、著るしく極限された抽象的定義に満足してしまつたのである。

我が國に於ては、デッサウエルに依つて自己の技術論を展開した馬場氏は技術の核心を發明にもとめ、發明は「新しきもの創出である。」とし發明によつて具體化されたものが技術の理念であり第四の世界であると考へた。

此の様な第四の世界は絶えざる技術の更新によつて近ずき得

るものである。^(註7)

又一方廣義の技術を一定の目的を達成する爲の方法であり其の爲の行動の仕方であり、之に依つて一定の目的の實現が少くとも或る程度達成されるものを意味すると述べている。此等の見解は少くともデューツェルやゴットルにもうかゞわれゴットルの如く「自然支配の方法並びに補助手段の全體或は意欲された効果を達成可能にすることである。」と云う。以上の様に技術概念は超歴史的一般的な労働過程に於ける労働手段體系といふ實體概念からより抽象化され、その抽象的領域内に於てすら誤謬を侵すといふ形態變化を及ぼしたのである。此れはドイツの如く産業革命が後れ資本主義發展の極めて遅れた後進國に現れたことは特徴的である。

(註1) Sombart; "Deutsche Sozialism" 邦譯「獨逸社會主義」三一六頁

(註2) Sombart; "Der Zöhnung der Technik 1935" 邦譯「技術論」九九頁

(註3) Sombart; "Die Zöhnung der Technik 1935" 邦譯「技術論」二〇九頁

(註4) 馬場敬治「技術と經濟」現代經濟全集第三十一卷

(註5) 馬場敬治「技術と組織の問題」四頁

(註6) V. Goffie, "Wirtschaft und Technik" 1914 S. 206.

第三節 新しき技術論の提起

我々は今迄の過程から技術の本質に關する前段階の諸定義を考察した。此處に於て技術の究極的な規定を要する理論構成の検討にあつて、まず藤林教授の見解を提出し藤林技術論が戦後行われた武谷技術論の意義を擔うものであり、今後の技術論發展の基礎を成す物であることを明かにしなければならぬ。

藤林教授によると、技術なる言葉は多種多様の意味に用ひられて居り、學問的に明確に規定せられていない。

一般的には總ての知識並に技能の或は一定の結果を合目的に達成するための手段並に方法の總體を指稱するものであり、又マルクス主義の見解は通常技術とは労働手段の體系であると考へられて^(註8)いる。併し教授はこの通常の見解より廣汎なものを技術と見做している。何故なら社會科學者が探つて研究の對象とするものは單に物的技術に限られて^(註9)いるが此れは自然科學の基礎に立つてヒノロギイ―工學の著しい所産に捕はれるものである。つて、物的技術と並んで人的技術も同様に重要なものである。

そこで技術を抽象的に定義すれば「技術とは人間の創造の所産であつて、労働過程に於ける労働生産力の増大に役立つ方法並にその方法の具體化されたものである。」と云ふことが出来る。そして労働生産力増大の方法は、多くの場合には何等かの形で具體化された手段に轉化するものであるが、尙技術の中心が方法にあつてその具體化されたものにあるのではないことを見失

つてはならない。此の立場から単に労働手段の體系なりとする見解は不十分である。かように考へると技術は生産力の増大に役立つものであり、生産力決定の諸要素―労働手段、労働対象と労働力の内従來の物的技術は單に労働手段と労働対象に具體化されて労働生産力を増大したが、人間の労働力支出を合理化することは矢張り労働生産力を増大せしめるものである。例へば人間の労働方法の合理化、労働力配置の合理化や労働方法に關する教育の如きものである。かくて労働力支出の方法自體を合理化することに依つて労働生産力の増大に役立つ方法を人的技術と稱していい。勿論人的技術は特殊な物的手段を用ゆることに依つて容易にもされるが、常に必ず必要とするものでもない。

藤林教授は又戸坂潤氏、岡邦雄氏の如く個人的な熟練技能或は知能それ自體を技術と見做さず個人的技能を如何にして増大し得るかの方法が技術であると見た。

結論的に云へば技術と見做されるものは物的技術と人的技術の兩者を包含し統一したものである。

かように技術の本來の意義は労働力支出の相對的減少、人間の自然征服力の増大並に自由なる人格發展の基礎確立にあるから、それは人間の社會的生活に於ては労働條件の改善、物的生活手段の増大、文化水準の向上として現される。そしてそれは又最後に人間の労働の主觀的態度をも決定させ資本主義的能率

心理學とは違つた方向を持つ精神技術學の存在の可能性がある。

(註1) 藤林敬三「資本主義産業技術とその意義」四頁

(註2) 同右 「ソビエト五ヶ年計畫とその技術論」三田學會雜誌二十八卷三號四一頁

(註3) 同右 「同 右」同 右 四二頁

(註4) 同右 「資本主義産業技術とその意義」七頁

(註5) 同右 「能率心理學と人間技術學」三田學會雜誌二十八卷十號四二頁

此れまでの論述が示すように藤林教授は昭和六年にものにされた「精神技術學の危機」(三田學會雜誌二十六卷十號)から昭和九年にかけて既成舊唯研及その一派の技術概念に批判的な立場をとり新しき技術概念を提起するに至つたのである。

所が終戦後一九四六年二月「新生」誌上武谷氏の技術論が登場し技術概念の規定について明確な基準を示した。

即ち「技術概念は第一に現代の技術の困難を解決し、技術の發展に役立つ現實に有力なものでなければならぬ。第二に全技術史が正しく深く扱えるものでなければならぬこと」である。此の基準に立つて武谷氏は既成唯研の労働手段體系論の如く技術と労働手段を同置した、技術は實體概念で把握すべきでなく本質概念で把握すべきであり、相川氏の様に「過程しつつある手段」とした所をたいして變りないものであると考へた。

かように技術は三段階の論理學によつて解明せられる様に實踐概念であり、それを内在的に探究することが重要なのである。

その場合人間の生産的實踐は單に主觀的なものではなくて、自然の客觀的な法則の場に於て行はれ、かゝる法則を目的意識的に把みそれを利用して自然を支配することにある。

さて此の見解から考へると技術に對して今迄混同して扱はれてきた技能との差異は、前者が客觀的なものであるのに對して後者は主觀的心理的個人的なものである。つまり技術は客觀的自然的であるのに對して技術は主觀的自然的である。

結論的に云へば「技術とは人間實踐に於ける客觀的法則性の意識的適用である。」と云ひ得るのであつて此が技術の本質規定であり、労働手段等は技術の現象形態なのである。星野氏も此の見解に全面的支持を與へて技術を「目的實現の過程の因果關係の把握」と規定されている。唯注意すべき點は客觀的法則性の意識的適用とは岡氏の云へる如く科學の意識的適用にすりかえられてはならぬものであり、客觀的法則性とは本質的な法則が現象する全構造をさすものであつて、現實に構成される對象を實踐として主體的にとらへて理解される概念である。

(註1) 武谷三男「辯證法の諸問題」一四一―一四二頁

(註2) 田中吉六「技術論と認識論」理論所收

(註3) 武谷三男「辯證法の諸問題」一四四頁、星野芳郎「技術論ノート」七六一―八三頁

資本主義技術の史的構造

(註4) 武谷三男「科學と技術」一一三頁

(註5) 星野芳郎「技術論ノート」六六頁

(註6) 田中吉六「史的唯物論の成立」、「マルクス理論の解明」二二三頁

武谷技術論は氏が述べて居られる様に昭和十五年の末に到達したものであり、それ以前の技術論の總括的批判の上に確立されたものであると云はれてゐる。

併し私は武谷氏が本質的な技術論に到達される以前に藤林氏によつて既成論が批判され、正しき技術概念への一段階が昭和八年に打ち立てられたことを完全に看過して居られることを指摘したい。例へば武谷氏の技術規準の第一に適應する本質的概念はすでに明瞭に把握されて居り、第二の技術史が正しく深く取扱へるものの表としての「マニユファクチャ技術」の如き藤林氏にあつてはむしろ武谷氏の如き分業の徹底した事によつてマニユの技術が進歩するのでなく、分業或は協業に於ける労働力の配置を如何にして合理化し得るかマニユの技術であると考へることはより本質的なマニユ技術の把握ではないかと考へられる。又技能と技術の區別との關聯も藤林氏はゴットル及戸坂、岡氏等に對して批判的であり個人的な技能を如何にして増大し得るかの方法が(客觀的な)技術であると考へられた。

此の技能と技術の分離の誤りは武谷氏も指摘する様に熟練工養成の場合に重要なものである。確に藤林氏は此の點に關し

て、「労働力の質的向上」諸問題の中に熟練労働者は單に數量的に補足して行くことではなく將來へ向つて技術の眞の發展のために彼等の養成方法それ自身が再検討される必要があると述べている。かくて技能の一般水準が新たな角度から全般的に再検討され引き上げられて行くところに「一般並に特殊技術的知識の補足に向けられる所に労働力の質的向上に關して根本的に重要な問題がある。」

以上の様に技術の本質規定、技術史の取扱ひ、技能と技術との區別と關聯等武谷氏の考察と藤林氏の相似性を指摘し、前者が後者の上に劃期的意義をなしたことを示した。

(註1) 武谷三男「辯證法の諸問題」一四二頁

(註2) 藤林敬三「ソビエト五ヶ年計畫とその技術論」三田學會雜誌二十八卷三號四十五頁

(註3) 同右「同」右「一四十二頁

(註4) 藤林敬三「労働者政策の根本問題」七十二頁

第二章 資本主義技術論

人間の自然に對する過程「労働過程は人間生活の永久的に超歴史的なものであり、現實の我々の生活は歴史的に制約されたものである。それ故技術の本質なるものは労働過程に對應する概念であり、具體的な技術は歴史的技术として現象するわけである。従つて兩者は區別しなければならないと共に、統一的に

取扱わなければならない。本章に於ては技術の資本主義社會に於ける具體的意義を探究することにする。

勿論此處に於ては、抽象的な技術それ自身の持つ意義が如何に歪曲されて現象し資本家的利用形態の内矛盾した様相を示す事を特に労働との關聯に於て、資本主義的發展過程に照應しつゝ研究してみたい。詳細な研究ではなく極めて概観的にのみ記述する。

第一章に考察した技術の本質に關する見解の對立はその具體的分析に於ても極めて特徴的なものを持つてけると同時にその論理的矛盾を露呈する。

第一節 上林、岡氏の技術概念の具體化の批判

先づ第一に上林氏や岡氏等の技術の本質規定は労働手段體系論であるが、此の規定からは資本主義の初期に於ける協業やマニユの労働生産力發展の方法は理解出来なくなるのにも拘らず上林氏は協業に於ける技術の意義を次の點に求められている。

つまり技術の現象形態は資本制生産に於ける労働力と生産手段との分離の下では、その資本家的利用形態として現れる。先づ協業による労働生産性の發展は如何にして成れるかと云う點に關して上林氏は協業、競争により個別的労働の生産力力量的總和以上のものがある。併しながら労働様式は手工業と何ら變らないものであり、結局協業による労働生産性の發展の主要根源は労働力(「手工業熟練及社會的労働」)に在ることになる。

上林氏の技術概念の具體化に反して我々は此處にも正しき技術概念のあらわなる現象形態を見出すであらう。次に一つの歴史的段階を劃したマニユ技術の具體的形態を岡氏の所説によると「分業による協業としてのマニユファクチャ」なるものは一つの労働過程を幾つかの作業「部分労働」に分割し、此れにより時間の節約と熟練労働の増大を計らんとしたものであり、又それにより部分労働に對應する道具の多様化と特殊化を促進した。か

ように部分労働は手工業技術を分化し、機械の物質的條件を作り出す上に商品の生産の爲に必要労働時間を經驗的に確定するに至る。

總じてマニユに於ける労働の生産力の發達は労働手段「道具」によるよりも、寧ろ労働力そのもの「調節と配置」によつて行はれたのである。そして此の労働力の量的質的合理化によりつゝ労働者を特定部分労働のみの専門的生產機關たらしめ、精神労働を資本家に集積せしめ、他の一方に部分肉體労働者を置き變へた事はマニユに於ける労働力の一面的發展として又その歪曲化として特徴づけられる。

第二節 資本制機械的大工業

最後に機械制大工業及獨占段階に於ける兩者の主張と藤林氏の見解を示してみよう。武谷グループは未だ資本主義發展過程に於ける資本主義技術の具體的展開に關する論文をものにして居らず、唯日本に於いて技術論が如何に具體化されているかを

示して居るだけで、此れでは中間の環が捨棄されていることになる。藤林氏もマニユ段階の詳細な研究はされていないが、大工業に於ける物的技術の研究或は社會主義技術の研究は殘されている。

前述した様にマニユにあつては労働生産力發展の合理的な方法は労働力をテコとして行はれるが、大工業にあつては労働手段「機械」が主要積杆となる。機械なるものは原動機傳力機作業機の三部分から成立つものであり、作業機を中心として原動機は作業機と相互作用的に發達するものである。そして金屬性機械に對應する冶金技術の發展は、工作機械の創作へと變化し此處に同種機械の體系「機械の單純協業及異種作業機の體系」機械的分業に基く協業(本來的な機械體系)の基礎となつた。此れがコンベヤシステムに見られる様に連續性原理及自動性原理の體現せる自動的機械體系に外ならない。

併しながら資本制生産は本質的に生産手段(資本)が労働者(賃労働)を使役すると云ふ顛倒的關係にあるため機械労働は労働強度を標準的水準以上に増大する事になり、労働強化をもたらし。又機械體制は一定の機械運動に追隨する結果、筋肉労働と精神労働との分離が生じる。

同時に機械的生產は成年男子労働者の労働負擔の軽減といふ方向を取らず、それに代へるに未成熟かつ低廉な婦人労働及兒童労働力の占有使役といふ事態を生み出し、婦人兒童の肉體

的荒廢、精神的萎縮、道德的頹廢を生ぜしめる。そして此等の結果は廣汎な勞働災害と職業病を發生せしめるに至るのである。此等資本制的機械工業の生み出す矛盾は獨占段階に入るに従い益々發展し、世界經濟恐慌なるものは資本主義技術に對して阻止的役割を果すと共に次の戰爭の時期は軍需技術のみの異常な跋行的發展を齎らすものである。

なほ注意せねばならぬ點は近代技術の三大部門（冶金技術、工作機械技術、化學技術）は獨占企業に集中化され幾多の新しき技術の可能性は利潤の觀點から採用されずそのままになつて、剩餘價值は勞働力の價值をその價值以下に引下げることによつて生じていると云うことである。

(註1) 上林貞次郎「技術及勞働力の理論」十四頁

(註2) 岡邦雄「技術論」七七頁

(註3) マルクス「資本論」高昌譯第四篇第十二章三一—九頁

(註4) 上林貞次郎「生産技術論」六六頁

(註5) マルクス「資本論」高昌譯第四篇第十三章三五—九頁

(註6) 岡邦雄「技術論」八三—八四頁

(註7) 上林貞次郎「生産技術論」七六頁

(註8) マルクス「資本論」高昌譯第四篇第一章三五—一頁

第一項 機械制下の技術について

ルビンシャインによると「資本主義の下に於ける機械生産の目的は生産諸力の發展ではなくて、餘剩價值と利潤の増加を目

的として居る。それ故に新しい機械が資本主義の下で利用せられるのは單に機械の費用とそれが取つて代る勞働の費用との差額が、平均利潤と市場に於ける成功的な競争とを保證する場合に於いてである。」

明らかかなことは資本主義下の機械の發展が益々勞働を外面的に容易化し、不熟練勞働を増大させる。つまり成年男子勞働者を婦人勞働や兒童勞働によつて驅逐させ、此の結果失業豫備軍を増大させ、多數の者を貧困におとし入れる。そして此の事は現業勞働者の勞働諸條件を壓迫する所以となる。即ち勞働時間の延長と賃金の切下げとが益々容易に行はれるようになる。

資本主義下の技術發展の諸特徴は機械が自動機械體系に發達するにつれて擴大強化せられて行く。かのフォード工場に於けるコンヴェーヤシステムに見るように、資本主義合理化を促進し、多數の勞働者の無資格化と失業の増大、勞働條件の悪化等一連の窮乏化をもたらす勞働者は部分勞働化される。かくの如き勞働強度化による窮乏の一般化は又人的技術の分野に於いてテイラーの時間並に運動研究に於いて極致に達する。それは物的技術と共に過大の身心のエネルギーの支出であり、疲勞を蓄積させ勞働力の早期的涸渇を惹き起すものである。併しながら資本主義國に於ける産業技術の一般的发展傾向の中にあつても此れが生産關係により抑制せられることがある。特に我が國の如き低賃金地盤にあつては機械の採用より勞働力が廉價である

ために技術發展が著しく抑制せられる。(註3)

第二項 獨占段階の技術について

資本主義が獨占の段階に入ると技術的進歩を一方に於いて促進せしめるが他方に於いて此れを抑制するものである。何故なら前述のように勞働諸條件の低下や恐慌がその主要根源となるから、それに加へて獨占價格による超過利潤の保證と市場狹隘化はその阻止的要因を強化するものに外ならない。

かように現代社會にあつては科學技術の可能性があるのにもかゝらず實際經濟上の應用との間には著しいひらきが出來て來る所に資本主義技術の主たる特徴がある。

(註1) M. Rubinstein; Science, Technologie and Economics under Capitalism and in the Soviet Union. 1932, P. 15.

(註2) 藤林敬三「ソヴェート五ヶ年計畫とその技術論」

五一頁

(註3) 藤林敬三「資本主義産業と技術の問題」三六頁

(註4) 同 右 「ソヴェート五ヶ年計畫とその技術論」

五四頁

岡、上林氏の如きは其の固定的な勞働手段體系論から具體的な資本主義技術を検討する場合「機械勞働手段の意義とその及ぼす影響のみに眼をうばわれて勞働對象が裝置産業「化學工業に重大な作用を及ぼした點や、勞働強化の合理的方法が案出さ

資本主義技術の史的構造

れてゐるのを看過する。ルビンシャインによると物的技術と人的技術が資本制的利用形態として明瞭に現象してゐる點を鋭く追求してゐるのは適確な技術概念把握の具體化として、肯定し得る所である。そして我々は資本主義技術は一面では生産力の増大を利潤原則に反しない限りには於いて發展させつゝ、他面では絶えずその發展を抑制してゐるといふ二重性をもつものであり、史的唯物論の基本命題の具體的姿態に於いて把握しなければならぬ點を再反省すべきであるとともに資本主義生成過程のマニエに於ける技術をより精密に検討し分析すべき必要があることを指摘したい。(一九五二、五、一五)